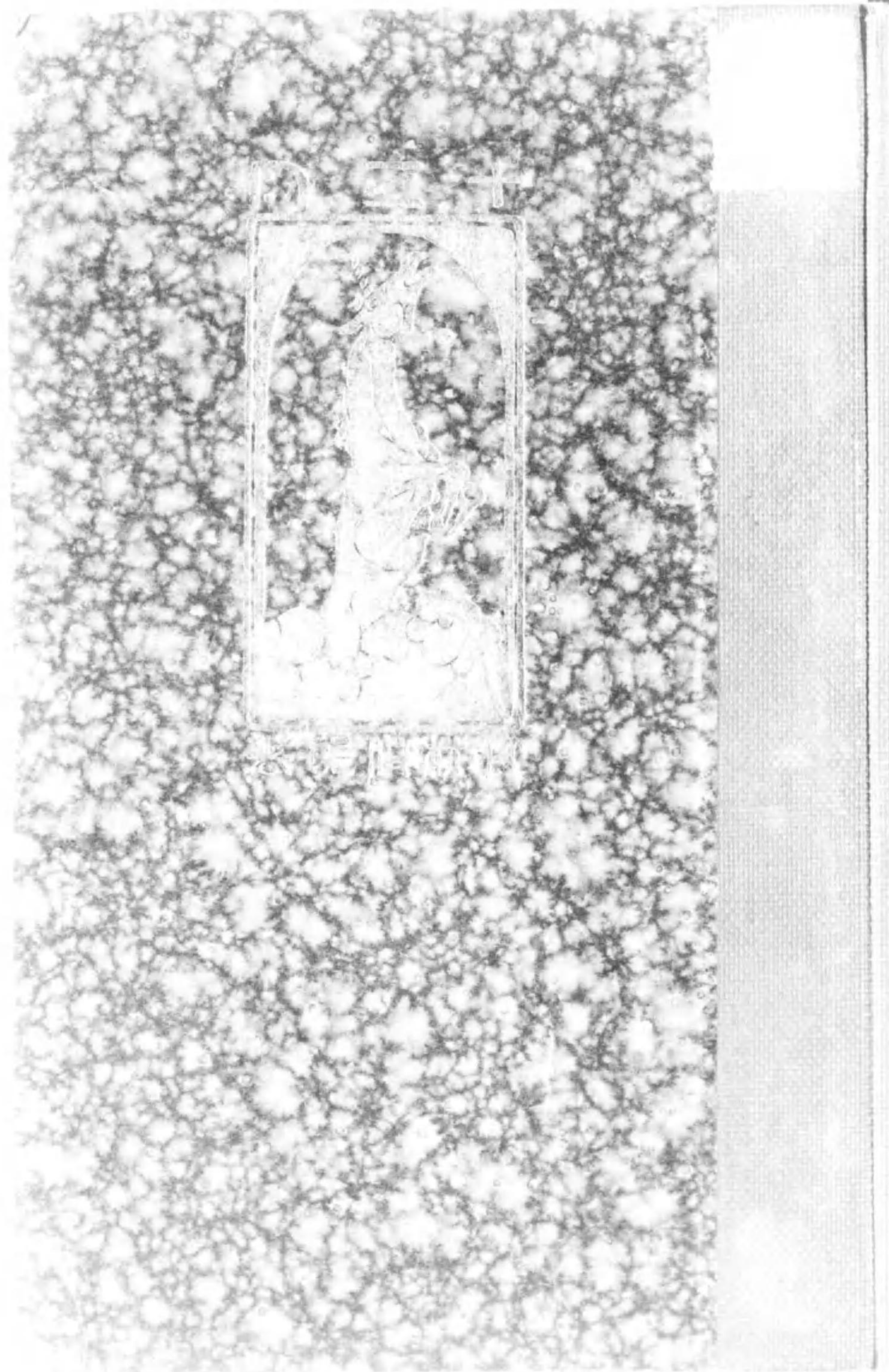


始





十三月

特234
336



詩集

月 三 十

著 郎 俊 村 竹

年 九 十 二 百 九 千



幀 裝

郎 四 孝 地 恩

序

過去十箇年間の詩のうちから「玉馬」を編輯する。編輯にあたり、現在の僕に、あまりに不満なものは、すべて削除した。勿論、茲に輯録されたものも、猶、著しく不満なもののみであり、時に従つて、削除された諸篇と同じい運命を擔ふべきものではあらうが、流れゆ

く濁流の面に姑し花咲く渦として、いま猶、多少の愛着を持つ。

以前、僕は、夢幻と恍惚に詩を求めてゐた。詩集「葦茂る」並に本集に收められた「黒き樹」「白樺」「甲板」等がそれを語る。やがて僕はさうした詩に飽足らずなり、從來の殻を破らうと悩み出したのが「砂漠の笛」である。従つて「砂漠の笛」は變化には富むが、雑駁であり、陰慘である。最近、僕はその雑駁と陰慘のうちに幽かな統一を見出し、固定と透徹に詩を求め出した。その結果が「玉馬」である。

（玉馬）は未だ殆んど書かれてゐない！

出版其の他につき、室生犀星氏を、装幀につき、恩地孝四郎氏を、色々煩した。記して感謝の意を表す。

千九百二十九年十月

竹村 俊 郎

玉馬は空想的動物である。しかし月光の透徹と彫刻の固定に結晶するスピリットであり、跳躍する怪馬である。その色雪の如し。玉馬を以て本集と名づけやうとしてゐたところ、魚眠洞主人、玉馬はどうも玉の印鈕を思はせるとあつて、「十三月」を提案して呉れた。玉馬と「十三月」は相通ずる。然も「十三月」は確定に於て遙に玉馬に優る。乞うて本集の書題とした。

目次

玉馬

君！	獨坐	再び詩は	詩は	自畫像
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
26	24	22	20	19

嗟嘆………	書かねばならない………	若き女の死………	阿房………	或乞食の詩………	揺るる鐘………	瑩穴………	或風景………	花の詩………	流轉………
73	70	68	63	63	62	60	59	56	54

曇日………	歸去る………	沙漠の笛	秋………	偶感………	飛行機………	君は言ふ………	街頭の星………	坂………
52	49		41	42	41	36	31	28

日曜	白樺	なだれ	快活	清涼劑	無題	戦利品	上陸	土耳其の國旗
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
:		:	:	:	:	:	:	:
109			93	96	99	100	102	104

甲板	朝	僕第二	僕第一
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
:	:	:	:
89	78	76	74

月光	亞麻色髮	ある夜	風と戯るる	ろーりんぐびつちんぐ
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
:	:	:	:	:
81	84	86	88	89

玉馬

|| 一九二八 | 一九二九 ||

自畫像

僕は夢の彫刻師

思惟の刀で渾沌を切り刻む

晴天

眞晝の建築が僕の傑作

詩は

勿論 詩は溝とほから生れる

蜻蛉が溝から飛び出すと同じやうに

そしてそのためかうも響はしい

この眞實を疑ふ者は

天國は地獄の虹であり

宮殿は大工の夢であることの眞實を
恬として忘れてゐる

再び詩は

詩は書かれたものにない
書かるべきものにある
勿論 紙の上にはない
人間の住むこの地上にだ
詩が書かれたとき詩は死ぬる

更に詩を生むために詩は死ぬる
それゆゑ一つの詩が書かれぬかぎり
人間の住む地上に書かれぬかぎり
その詩は儼然と生きてゐる
山の如くに生きてゐる

獨坐

僕は一本の蠟燭の如く燃える

深夜に明照し眩惑する

寂しさ――

そんな上_レ_レりの感覺は

蠅の如く飛び去つた

恥しさ――

そんな可愛い少女心は

夕映の如く消え去つた

僕は一本の蠟燭の如く燃える

僕は明照し眩惑する

君！

地を踏んで見たまへ
君は一本の喬木だ
醗まずる秋光を燦ま燦浴びる
驕れる一本の公孫樹だ
眼を放つて見たまへ

君は一脈の山嶽だ
青空を切斷して屹立する
誇れるアルプスの一脈だ
眼を揚げて見たまへ
君は一張りの強大なる弧うまであり
大鐘の如き蒼穹であり
鈴の如き太陽を持つ

坂

坂は僕等の心を映す
僕等の心を垂直に擴げて見せる
ひとつの輝しき坂に對する
釋迦の掌の如き坂に對する
何たる喜悅 何たる飛躍

坂は僕等の希みを映す
僕等の希みを垂直に伸して見せる
ひとつの坂を登りつめ
再び新しき坂を望む
夕陽の渦巻き眩惑する
朝陽の凝集し反撥する
再び新しき坂を望む
何たる壯快 何たる冒險

坂は僕等の姿を映す
營々ひとつの坂を登り
更に新しき坂を望む
天を突く階段を望む
何たる壯絶 何たる賭博

街頭の星

I

星を持たぬ人人がゐる
必ず持たねばならぬ星を彼等は持たぬ
彼等は天を仰がない

彼等は眼を地上に引摺る
彼等は建築を見ようとしな
彼等は穴居を模索する
彼等は人間を見ようとしな
彼等は骸骨を抽象する

II

彼には一つの星がある
夜半の風に梳き澄まされる
星の一つを彼は宿す
彼に遇ふことはすがらしい
卓上の風を感ずる
彼と語ることは欣ばしい
高鳴りする水を感じずる

III

僕は近頃愉快なのだ
塵つぼい春さきの街路を歩きながら
何處からともなく星かけを感じるので
幽かな星かけが窺れた僕を明くする
街路樹の未だ堅いつぶら芽すら
その星かけを感じ
張み解るるやうに思はるる

IV

僕を生んだのは土だった
「母」と呼ばるる土だった
土は星かけを映さない
彼女は水ではなかつたのだ
彼女は僕を解らない
彼女は僕を憎らしい

君は言ふ——不幸な彼を愛せよと

君は言ふ——不幸な彼を「愛せよ」と
歩道に微びた面を曝し 爛れた肉體を引摺る乞食を
ぼろぼろな魂を臭い襤褸で味付け賣物とする形骸を
君は言ふ——不幸な彼を「愛せよ」と

——不幸な俺を憫み下さい！
彼の哀れつばい聲色は僕等の感情に媚びて來る
僕等は五錢の白銅を彼に投げるに憚らない
そして別にそのことを罪惡視しない

——不幸な俺を憫み下さい！
確かにその聲色は僕等をひととき反省させる
しかし僕等に愛を芽ぐましめはしない
却つて僕等に憫然を萌さず

しかし君は言ふ——不幸な彼を「愛せよ」と
運命の無自覚者 その諷刺畫を
その諷刺畫もて僕等を強請る脅喝者を
君は言ふ——不幸な彼を「愛せよ」と

——不幸な俺を憫み下さい

彼の哀れつぼい聲色は確かに僕等の感情に媚びる

しかし僕等の意識を明くはしない

否 反對に暗くする

愛を惘然と履違へたは中世の博愛主義

惘然は痴情 無知の化粧 場末のカツフェのアイスク

リーム

不幸な彼を「愛せよ」——君のこの言葉は

僕にとり怠惰と迷蒙の申譯ときり響かない

愛は惘然ではない 寝ぼけ顔の痴情では決してない

愛は體驗の 知識の究竟に屹立する

自覺の 鋼鐵の 冷輝する沈黙の扉に白熱する

ジグザグであり 火花であり 電光だ

君は言ふ——不幸な彼を「愛せよ」と
痴情の賣物を往來に誇る 無自覺の厚顔を「愛せよ」と
確かに僕は彼につき憫然する
しかし決して愛せはしない

飛行機

青空を人間が飛ぶ
淺黄の翼を耀めかし
響然と唸りながら——
何たる颯爽！
何たる勇氣！

偶感

彼方に欠伸する
かの洞穴を恐るる譯では決してない
柩は誕生と共に
遺書は生長と共に
既に既に作られ

作られぬる——
ああ　しかし時計のチクタク……
時計のチクタク……
針のやう髓刺さず時計のチクタク

秋

淫蕩なる

夏の幻想の沈澱

秋

市街は陵々

玻璃の空を切り

踵憂々
磔に鳴る

沙漠の笛

|| 一九二七 | 一九二八 ||

僕は伊太利の胡弓を破り

亞羅比亞の沙漠の風に鳴る

マンモスの笛を得た

歸り去る

都會の空に幽かな紅を漂はし
日はいつか灰色の彼方に沈んだ
夕闇はひそひそ街路を襲ひ
ちりぢりに人人は家路を歩む
ちりぢりに人人は家庭を夢む

ひと日が終つた安心と憂鬱から
灰色の彼方に家庭を夢む

明るい一點の光をのぞむ

——例へ光は鬼火であらうと
漂人の見る鬼火であらうと——

華やかな喧噪を夕暮に捲起し

人人はすべて家路を急ぐ

役人 勤人 商賣人 乞食まで

ひとつの家庭を夢見ねばならず
灰色の彼方に消えねばならず

曇日

— E. T. の顔 —

雨雲に覆はれた太陽の面おもてのやうに
彼の顔は暈ぼけて見える
そのため正面から彼を知ることとは困難だ
だが 彼の顔の周圍まわりには
雨雲から放射する日光のやうに

仄ぼかな白光が圓を畫いて煙つてゐる
そして思索に悩んだ彼の薄い髪の毛が
その圓光のうちに戦たたかいで見える

流轉

— Lillian Gish の 顔 —

僕が彼女を倫敦で知つたとき
彼女の顔には雪が降つてた

僕が彼女を東京で再び見たとき
彼女の顔には雲が降つてた

このつぎ彼女を見るときには
彼女の顔に何が降らう 誰が知らう

花の詩

妾は枯れ凋みゆく
妾はやがて眞夏の懶い夢と
凍りつく冬の堅い夢とを結ばねばならぬ
だが 再び生るる春の日の
微笑む太陽を思ひ

光る風とゆらぐ土の香を思ふとき
枯れ凋むことは妾にとつて何でもない
むしろそれは大きな安心です
しかし妾はときどき思ふのですが
妾のこの枯れ凋み再び生きる操事の
未知の過去から未知の未來に渉る操事の
或は無用の操事ではあるまいか
そのため何時の日にか
残酷な退屈が妾を蝕ばみしまいか――
すると妾は輝かしい太陽の下で

一振の黒旗のやうに揺れるのです

或風景

塵埃にまみれて暑い街路を歩いてゐると
ぎつしり詰つた兩側の建築の窓窓から
焼け爛れた魂どもが鈴なりにぶら下つてゐるやうだ
彼等は火焙にされた猿の死骸のやうで
都市のどよめきにつれかたかた揺れる

瑩穴

——職を求めて——

この骨を何處へ置かう
僕は骨壺をかかへて薄暗い瑩穴をゆく
だが どの隅にもどの隅にも
見知らぬ人人の骨壺がうづ高くつまれ
そのうへ燈火ちかりが煌煌とついてゐて

僕の骨壺を置く場處はひとつもない

揺るる鐘

底知れぬ深淵に吊られてゐる鐘がある
あたりは深い水影でうす暗い
鐘はときどき光る波紋を放つて揺るる
私が不安にうなだれ沈むと
私には揺るるその鐘の音がかーんと響く

或乞食の詩

俺にはもう運命も偶然もない
昔 戀と快樂のあつたあの時分には
俺にも若草のうちに風に吹かれ
運命と偶然とが輝かしく顫えてゐたものだった
だが いまはもう運命も偶然も干乾らびた

何處を見たつて女の瞳一本顔えはしない
路傍のどの隅にだつて銅貨一枚落ちてはゐない
あるものはただ俺の頭上にまるで神経のやう
幾條となく張り渡された電線だけだ
電線に虻のやうに群りつく苦患のかんかんした反響だ
けだ。

64

さうしてその下の敷石に坐る俺の
遙かに遙かに眺めるものは
途方もなく龐大に 黄色く 樺色に きらきうと輝く
砂漠

ひとつの岩影すらもない焼けつく明るい真晝の砂漠だ
それから円く紅く 滴るやうな太陽だ

65

阿房

僕が寂しきに杖を振ると

観衆は面白さうにすくす笑ふ

僕が悲しさに身を絞ると

観衆は呆れたやうにげらげら笑ふ

おお 神様 僕はどうすればいいのだ

僕にだつて寂しさがあり悲しみがある

それなのに僕の周囲まわりにはいつも嘲りと笑ひが渦巻く

そこで僕は感極まり

涙を流すと

観衆は再び笑ひの堰を切り

阿房のやうにどつと笑ふ

若き女の死

ほんの姑く

彼女は蝶のやう日光に翻つた

ほんの姑く

彼女は風信子のやう春風に吐息した

それが彼女の人生の全部だつた

春の日の一時間よりも永くはなかつた彼女の人生

だが その短かい人生に於て

彼女は彼女の割役を完全に演じた

彼女はひとりの男を知り ひとりの子供を生んでゐた

焚屍人たんしが彼女の骨を一壺いっこに振ぢこんだとき

彼女の男は明るい冬空に育ちゆくひとつの斑點はんてんを感じ

彼女の子供は男の胸にすがりついた

書かねばならない

著者の血もまだ乾き切らぬのに
早や七十銭から二十銭まで割引せられ
夜店に屍を洒してゐる一冊の本を窃かに買ひとり
僕はつくづく思ふたのだ
僕はもう書くまい 書くまいと

しかし朝が来て机に坐ると
僕は何かしら書かねばならない
あまり愉快ではなかつた昨夜の事件をすら
僕はいまかうして書かねばならない

鳥も啼かない

この師走の泥濘ぬかるみの道は何處までつづく
友もない

この蒼白の落莫の道は何處までつづく
風は行手に旗を引きちざり

夜は庇にひそひそささやく

鳥も啼かない

この師走の泥濘の道は何處までつづく

僕 第一

僕は路傍みちばたに身を投げた

僕の上を笑ひながら囁ささやきながら

風かぜが通る 塵埃ほこりが通る

僕は路傍で仰ぎ見る

僕の上を喘あはぎながら悲しみながら
馬うまが通る 人間にんげんが通る

僕は路傍で眼まなこを瞠みる

僕の上を笑ひながら咽すすびながら

愉快えんげきに杖つゑ振ふる僕われが通る

僕 第二

僕が眞當の僕になり切るとき
僕は僕をのせた鏡とならう
僕は僕の足裏から髪の毛まで
いちいち明白に映し得よう

だが僕が眞當の僕に還るとき
僕の姿は散つてゐよう
風に吹かるる塵埃のやうに
僕の姿は散つてゐよう

さうして僕の瞳ばかりが
陰のうちに大きく見開いて
塵埃のやうに吹き散らさるる
僕の姿を見つめてゐよう

朝

地球は昨夜密林のうちで
宇宙をゆるがしながら呻いてゐた
しかし今朝は華やかな馬車に乗つて
眩めく太陽にむいて走つてゐる

甲板

|| 一九二五 || 一九二六 ||

月光

——錫蘭人の印象——

遠い昔暑若しい午睡から湖畔に目醒め
君等は月光に歌ふ漣と風に囁く菩提樹を見た
白無垢の木蓮花まぐわりのあが君等の背景ほっくであり
夜の蟬が彼方の茂みに鈴を振る

夜が君等の目覺めの 思想の曙だつた
暑苦しい午睡の夢からすがすがしく
また華やかに神々しく夜の實在へ翻へ生きる
そのとき君等は馨はしい思想の匂を嗅いだ

君等は情緒が晝よりも夜に花やぎ

繊細であり明るく聴いことを

また思想が情緒よりも更に月光に適はしいことを悟り
さうしてそれを大きな記憶に書きつけた

それから幾千の月日が流れ流れたことか
その夜の月光が君等の顔に宿る
その夜の月の思想の冴えと深さが
いま猶君等の顔を影づけ形づくる

亞麻色髪

甲板にはつねに秋のそよ風の吹く
熟れた太陽の光線を 秋の晝寝の亞麻色髪を
媚びつ囁きつ そよがしながら吹く

ああ そよ風の光る舷に椅子を延べて

藍青に燃ゆる海を無心に見渡さう
さうして舷柵に凭り歌うたふ 歌ふ女の音楽を
秋の絃琴を ころゆくまで聞き惚れやう

甲板にはつねに秋の氣の満つる
そよ吹く海風が絶えず熟れた太陽の光線を
秋の晝寝の夢に疲れた亞麻色髪を梳る

ある夜

たくさんの人人が舷下を通るやうだ
なにかざわざわ呟きながら 祭日の夜の群集のやうに
一つの終局へ 灯あかりの耀めく殿堂へ急ぐやうだ
その聲が松風のやうに響いて来る
静かなる印度洋上の夜の十二時

この華やかな海の城郭が灯を消して眠りにつくと
けにたくさんの群集が舷下を通る

風と戯るる

なにがなしに悦しい氣の湧くときがある
暗い過去を假面まづくのやうに壁に懸け
私は何か新しい存在に移入したらしく思はるる
私は氣體のやうに自由で奔逸であるらしく
卓上に光る風と戯るる――

ろーりんぐびつちんぐ

さあ 船がすこし揺れてきた
君よ手を把り舳の方へ歩いてゆかう
朝陽が海を櫟るので
波奴がけたけた笑ひ出す われ等の足が踊り出す
不確かな私の生活くらしのやうに踊り出す 踊り出す

ろーりんぐびつちんぐ　びつちんぐろーりんぐ

船はまつすぐ東へ進む

郎かな太陽を舳に懸けて　青い印度の海を切り

圓い空に嘯いて——おお　美しい航海だ

ときどき風奴が悪戯わるさをするので　明るい君の顔が

ひよいと曇る——ちよつとあなたは悲しくなる

ろーりんぐびつちんぐ　びつちんぐろーりんぐ

ゆらゆらと舳の方へ君よ手を把り

元氣な歩調で歩いてゆかう　護摩訶史ゴマカシが現代の神秘哲

學

忘却が宇宙の仙丹——おお　愉快な航海だ

船に酔ふのも酒に酔ふのも戀に酔ふのも

みんな一切　波の泡沫あぶくで　彼方の岸では消えてしまふ

ろーりんぐびつちんぐ　びつちんぐろーりんぐ

なだれ

私はあなたに戀してゐる譯ではないらしい
だが 私の心はあなたの罪の臭を嗅いで
月夜の笛に憧るる蛇のやう
するするとあなたの方へ伸びるのです

快活

晴れた さうして耀しく 海が晴れた
ここにかうして立つことの 青い青い緑碧の
鳥影さへない海原の 波切る舳に立つことの
舳に碎くる白い飛沫^{しぶき} 驚き跳ねる飛魚を
ここにかうして見まもることの

ああ 何んたる愉快と喜悅を齎すことか

飛沫しぶきがあなたの眉毛を濡らし 劇しい風が叫びつつ
あなたの黒髪を纏れさせ 藤色の着物を吹きまくる
ああ 私はわれ等の頭上に揺るる蒼穹のやう
圓まどかに 愉快に 悦ばしく 快活だ

ただ ここにかうして美しい女性とともに
青い青い綠碧の海 白い飛沫しぶき 驚き飛び散る緑の飛魚
を瞥みまもる事の

ああ 私はわれ等の頭上に揺るる蒼穹のやう
圓まどかに 愉快に 悦ばしく 快活だ

清涼劑

おい君 さう急がんでもいい
僕等の歩みは御婦人ゴフじんにはすこし早すぎる
剩へ熱帯の太陽は強すぎる
姑らくその海近い旅館ほてるの休憩室ちゆうしんで
かけ深い椅子と風に光る卓子てんごとを求め

ゆつくり煙草を喫くはうではないか
さうしてそこから印度の空を
藍の滴りさうな印度の空を觀賞しやう
長い航海に陸地を見ることの
僕等にとつてどんなに必要であることか
そのやうに僕等にとり このひとにとり
また戀にとり
ときどき清涼劑を飲むことがどんなに必要であること
か
おい君 さう急がんでもいい

かげ深い椅子と風に光る卓子てんごとを求め
ゆつくり煙草を喫すはうではないか

無題

蒼白き船底に臥す君よ
波の音の夢に入る
君聞くは人魚の歎き
君歎ぐは藻草の憂愁うれひ
黒き悔恨の蝙蝠を船窓まどに懸け

戦利品

豆に饅頭 まんごうにまんごすていーんもお買なさい
山羊の焼肉に胡瓜 砂糖の這入った氷水をも召しあが
れ
ついでに歩道に軋る飼猿をも接吻しておやりなさい
ただ 淡墨色のあどけない瞳を輝かす ただ それだ

けて

あなたはあなたの「男殺し」の罪業を完全に贖罪する
そこで私は喜んであなたの贖罪の餌にならう

豆に饅頭 まんごうにまんごすていーん 龍眼肉
垣根から盗み採った紅い花 黄色い花 藤色の花
それから夫君を叩くための細い籐杖が一本
山なす戦利品を自動車にたたき込み 嬉しく娛しく
華やかな祭日の夜のやうに瞬く埠頭を左に見
熱帯の夜をわれ等は駆けよう 愉快に愉快に

上陸

船は今朝陸へ着く

殆んど二箇月

好奇の焦點 美しき拍車 夢の投手なりし女のひとよ

慌しく散ばれる喫咽室の一隅に

新しく装ほへる深紅の天鵞絨に

やや物思ふ君を見るとき

僕は既に

既に昨日の君の空虚な幽霊を見る

上陸——君は君 僕は僕

耀しかりし記憶のみ猶鮮かに

土耳其の國旗

あれは媚めかしい香港の夕暮だつた
彼は夜が誘いた一本の影のやう
甲板を大跨によろよろしてゐた
妖精が火の粉を振り撒いたかのやう
香港の山山は飾光を綴り 舷下では舢がことこと鳴つ

てゐた

突然 彼は僕の詩の一節を歌ふのだつた
夕暮となれば灯を戀ふる
夕暮となれば 暗き心に
紅々と紅き灯を戀ふる――

晝は日を避け 深々と船底に
鱗のやう長々と身を横へ
船窓を洩るる薄ら明りに
奇怪な夢を織りつづけ

夜になると夜に憑かれたもののやう
いつも甲板をよろよろしてゐた一人の男
褐色の鬚毛と光る額と水色の眼の持主
六尺に垂んとする好丈夫 柔道が三段
彼は何故か暗夜に星を孕んだ三日月
土耳其の國旗に似てゐた

白樺

|| 一九二二 | 一九二五 ||

日曜

固くかぢかんだ鈴懸の梢に
薄日が霜を置いてゐる
銀色に澄む窓外の街路を
すうーとバスが通る
疎らな人に乗せながら

市街

何處へ行つても石だ 鐵だ

木材なんてちつともありはしない

觸るるページ 見上ぐる建築

軋るバス 往來の喧囂

何處も此處も鐵だ 鋼鐵だ

ぢつにかんかん堅いのだ

僕は昔兵隊にゆき

靴の裏から火花を散して行軍した

しかしいま全身から火花を散らして市街を歩く

ぢつにかんかん堅いのだ

「紙と竹とで出来た家」

ロテイがさう日本家屋を呼んだのも

決して無理でない 不思議でない

冬の街

夢を求めて来たのです
夢見る霧と赤い暖爐をひたぶる望み
僕のはるばる来たのです
それなのに黒霧くろつぐは早や僕の咽喉のどを苛さいなみつづけ
下宿の暖爐の節約は

僕にシングの真似させる

I know each shop, and all

These Jews and Russian Poles,

For I go walking night and noon

To spare my sack of coals.

— J. M. Synge —

荷船

荷船 荷船

昨日も今日も

チームズの鉛色の悪意ある腹の上に

黙々と浮沈する荷船 荷船

真黒な荷船

師走の河風に噛まれながら
チエルシーの冬の淋しさにも
バターシーの工場の爆音にも
ぢいーと何かを忍べるやうな黒い荷船
啞の荷船

僕はふと荷船に自分を較べて見た
すると不思議に涙が流れた
涙は一杯のコクテルに似 春雨に似てゐた

バスの屋根

霧に凍りついてゐた灰色の思想を
僕は明るい五月のバスの屋根に持出し
思ふさま春風になぶらかした
霧に縮んだ思想は老耄の吝嗇坊のやう
姑く都會の眩しさに眉を顰めてゐたが

いつか都會の轟きのうちに吸はれて消へた
僕には行先も目的もない
ただ乗つてゐればそれでいい
ただ走つてゐればそれでいい
（だつてこんなに愉快ぢやないか）
やがて紅色に日が暮れやう

都會の核

—ハイド・パークにて—

街路にはいま戀があり 歎きがあり
飢餓があり 争奪があり 歡樂があり
一切の腕あてまが羽ばたいてゐる
しかしここにはそれ等一切の影のみが
それ等一切の羽ばたきの反響のみが

遠い山かげの津浪のやう轟き落つる
僕は口笛を吹いてみた
口笛の音はすがすがしく奇麗に澄んで
遠く街路の騒音の方へ走つていつた
僕はステッキを振つてみた
ステッキはひゆうひゆう叫びながら
戯るる微風のうちにきらきら輝いた
僕は四方まわりを振りかへつた
四方には市街が犇々ひしめき合ひながら
煌びやかな唇氣樓のやう揺れてゐた

孤獨

— クラバム・コンモンにて —

一人去り 二人去り

僅かに出来た友達もみなちりぢりに歸り去る

そして僕は明るい山の手から

この貧民街へ越して来たのだ

羊肉と腋香の鋭い下宿へ越して来たのだ

何たる肅籜 何たる落莫

しかしまた何たる慰安 何たる安心

下宿の女將の吝嗇の煩さから

自分の財布を搾る夜毎の蠟燭

蒼白い屋根裏に一本の白い蠟燭が

夜毎僕を待ちくたびれる

黒き樹

|| 一九一九 | 一九二二 ||

種族

彼等には子供が生れる

相互の親頼と愛撫の報酬として

薔薇色の美しさと和毛にじほの柔かさを持つ子供が生れる

彼等は子供を夜の海邊に置く

My tantalized spirit
Here blandly reposes,
Forgetting, or never
Regretting, its roses —
Its old agitations
Of myrtles and roses;

For now, while so quietly
Lying, it fancies
A holier odor
About it, of pansies —
A rosemary odor,
Commingle with pansies
With rue and the beautiful
Puritan pansies.

E. Poe

晝の温氣をほんのり含む白砂の上に
彼等は子供をそつと置く

夜露と日光が子供を育てる

静かな海鳴が子供を慰め 木の葉の戦そよぎが子供を戯れ

さす

かうして子供はだんだん大きくなる

子供は彼の父母を知らない

何故なら子供の父母はとうに死んだ

—— 彼等は岩かけの苔のやうとくに萎んだ

彼等は人間でも獸類けだものでもない

彼等は風であり 水である

みごもる貝

そこには八つ手の葉が重たくしなだれ
絹のやうな霧雨が絶えず降りそそぐ
憂鬱に煙る春さきの匂は
いづこよりか漂ひ流れきて
暮れ惱む静けさのうちに閃めきかげらふ

暗さのまさる室内に

湯沸の湯気は花やかにたぎり

いま軽き疲れはかすかなる愁に芽ぐみて

すずろに人の心に迫る

友よ友よ 君はかの咽び音を聞かないか

夢幻ゆめまぼろしに慟なげずみゆくあの八つ手の葉を透して

二つの美しき貝ありて

互に相牽きつつ悲しみつつ

むむと歎くかの二つの貝の咽び音を

山椒魚

私は鬱憂の山椒魚です

紫色の目簾まぶたを着つけ 黒い天鵞絨てんじやうに包まれた鬱憂の山椒魚です

私は方形に仕組まれた玻璃がらうの浴槽ゆそうに世にも淋しい ある貴族の庭園に

悲しい噴上げの下に置かれました

厚い玻璃を透いて

朧ろに光が流れ入ります

その薄明のうちに獨りゐて

禮儀正しく夢見るのが私の役目なのです

黒い土を衝いて静かに佇立する

樹木の寂しげな姿や 意味や

または木の葉の秘めやかな鳴咽なげなげなど

私は玻璃越しに認めてもみま

またときどきは樹木のあひ間を縫ふて
鈍い鉛色に揺めく人間の悲しい像かたちをも
私は影のやうに眺めもします
けれどもそれはあまりに佗しい 寂しすぎる

私はいつも獨りゐて

薄明のうちに獨りゐて

私を環るゆるやかなゆるやかな水の微動に浮沈する
水は歎きつ欣びつつ

私の四肢を翫り 私の黒い着物をそよがせます

さうして

私の夢見るのは

この長長しき怪物の夢みるのは

紫色の目簾まぶたを幽かに透して

かの鬱憂と情熱の交はる境

蒼白く光る透徹のあやしさです

散策者

秋になつた
いつ知らず北風が吹く
收穫とらひのすんだ野面を 畦畔あぜの寥さびの花を
軽く冷めたく北風が吹く かうと吹く

私は夢見る魂と暗いところを連れて
さびれた野面を 畦畔をゆく
移り氣な雲がおりおりかける
さむざむと耀いた野面に 私の行方に
暗く明るく 不審な影を投げる
北風が吹く かうと吹く

何事もない 何事もない
みすぼらしい鴉が野のとまり木にかあーと啼いた
不吉な過去のやうに

何事もない 何事もない
北風が吹く 無心に吹く
遠い遙かな地平へ 銀色に乾いた風景の眞只中へ
かうと寂しく 鳴りながら吹く

北國人

嶮しい山山がいよいよ嶮しく
黒い地面がますます黝ずみ
固く凍えて 皎と光る
冬が来た
酷しい冬が頭を擡げた

峻しい山山の嶺の さむいさみしい白い叢雲
冬の威嚇がそこから轟々せまる

北國の人人よ

黒く凍える地面に立ちて

君等は鋏を把り 斧を振る

陰氣な曇つた空と白い雲が君等の相手だ

さむいつめたい自然に對して

君等は忍び 生きねばならぬ

祖先の拓いた黒い地面に

君等は再び足跡を捺さねばならぬ
君等の背後には影が**おびえる**
執拗な君等の祖先の憂鬱な影が**おびえる**

自然から拒まるる人人を見る

さむい 酷しい 凍えた地上に

鋏を把り 斧を振る人人の閃めきを見る

虐げられつ 執拗に生きる

宿命の影する生命を見る

鬱金香

明るい日ざしを花は求める

さうして 暗い影に戦く

自から投げる暗い影に 花はわななき 怖れて 慄え

る

ああ 日ざしに置かれた一鉢の鬱金香

明るい花瓣をあやしげな影が隈どる

あはれ 宿因の あやしげなるものの影

どこにもここにも ものの影

暗い鬱憂の 咽ぶやうなるものの影

白眼

これは暗い生命の蝙蝠である
解き難い宿因の結び目と みじめな存在の横顔よこがほから
あさましい罪を嚙んで
むなしく夜陰の松が枝に懸る
（生きるは畢竟舞臺たいの悲喜劇 鼻のない道化役者の

泣き笑ひ

存在はあまりに醜く
生命は曇り日の儚ない陽炎
あさましい蝙蝠よ 夜の陰たる松が枝に
むなしく目を剝く夜の怨靈
海はどうどう高鳴する
空には迷ひの星が光る
ああ あはれ 不吉な種族の遠い影

月明

月明しつきあかる

庭の木かげに濡れて歩む

いづこよりか迫る

ああ 惻惻たるものの影

私は痛み 愁へて影を見る

さみしい みじめな人間性から

至純な魂が罪に嗚咽する

自から拒否して 自からまねぐ

無気味な搾木の ああ 血腥き黒き影

(魂には罪がない さみしい人間性が罪をまねぐ)

ああ 神よ

何故に君は

かかるみじめな人間性を賦與したか

私が進めば影はとどまり 私がとどまれば影は迫る
断てば翻り 毆てば嗤ふ 怪幻の皮肉
ああ いづこよりか惻惻と迫る
黒いふしぎな 威力の影

叢には虫がすだく 軋りすだく

偶成

ああ 人生を理想のやうに送れるなら
生涯をあつた青竹のやうに夢みたい
ああ 海濱の ある旅館の一隅にあつた青い竹
真青に濡れた一群の孟崇竹
二月の霏雨が瀟瀟と濡れかかる

神意あらば 明あらば
人生の迷蒙から虚脱して
生涯をあゝの青竹のやうに夢みたい
狭青に濡れた凄然たる竹幹に理想は夢む
魂は凜凜たる竹が枝に

白百合

首のない手腕が室内を練りあるく
さうして 室の隅隅に明るい灯ともしをつける
真白な 殆ど 縫りつきたい手腕である

ああ 四月早春 卓上の青白い白百合の花

黄昏の壁に さむしい室隅に 煙りつつわななき浮ぶ
青白い白百合の花

花は黄昏のあやしさより

松柏の卓上に仄かなる影を投げ

黎明のあざやかさに戦き登る

黎明の朝涼あさすずのうちに戦き榮える

室内には咽ぶ 幽かなるひちりきの音

蝕くじばめる心霊のひと途すじの光り

貌

To M. S.

あさましい運命の横顔よこがおから

むちやくちやな社会の組織ぐんしから

機械のやうな人人に

めちやめちやに打擲うちなげされ 毆打うちうされて

わたしは幾夜を眠らなんだ

ある夜山陵の一室で

わたしは深い眠りに落ちた

さうして 美しい夢を見た

われ等の故郷は遠い國

北國の 黒い土と峻しい山のきびしい土地

そこにわれ等は星を見る

峨峨たる山の一指のこなた

燦と光る

赤い大きなすばるを見る

ともどもに 顔えわななくすばるを見る

故郷はさむしい夢の國

われ等の肉は黒い土

われ等の靈は白い霜

君は天上の猿となり

われは地上の犬と化す

額

To. K. O.

絶望と焦燥のどん底から
わたしは君に手をさしのべる
ああ 広い額 ふさふさと垂るる長い髪
なごやかにわたしの胸に觸れてくる
友よ これが信まことの友情だ

（海底の鐘は時あつて聲を發する——）
友よ これが人性の眞實だ

君は清純と精進ひととなりの人格

麵麩を喰み水を吸ひ 山羊の乳すら啜らない
わたしは地獄のさもしい囚人
黒き樹を噛み 不運な地上に苦しみ惱む

（天國と地獄にさみしい小徑がひとつある）
美しい「緑の小徑」がしひとつある

友よ 不思議な宿因の結び目と
あさましい社會の欺瞞から
われ等さみしく徑をたどる
美しい「緑の小徑」をさみしくたどる
われ等の行方は草茫茫
われ等の靈はまつたき孤獨

昭和四年十一月二十五日印刷
昭和四年十二月一日發行
詩集十三月
定價金二圓也

著者 竹村俊郎

發行兼印刷者 前田信

東京小石川區高田豐川町四三



發行所 武藏野書院

東京・小石川・日白臺
振替東京六七一四六

芭蕉襟記
室生犀星
價二圓五十錢

魚眠洞發句集
室生犀星
價二圓

草塵集
佐藤春夫
價二圓五十錢

一人旅する者
長與善郎
價二圓

終

